



Newspaper in Education

# NIEニュース

エヌ・アイ・イー

第107号  
2026.2.15

●特集・NIEで培う「人生を舵取りする力」▶1~3 ●第16回「いっしょに読もう！新聞コンクール」表彰式▶4~5 ●新聞の「今」——新聞ジャーナリズムの役割▶6 ●NIEアドバイザー紹介／フラッシュニュース▶7 ●〈NIEでいきいき〉〈NIEあれこれ〉▶8

©2026年 日本新聞協会

編集・発行 一般社団法人 日本新聞協会 TEL: 03-3591-4410 (NIE担当) FAX: 03-3592-6577 e-mail: nie@pressnet.or.jp  
〒100-8543 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル [https://nie.jp] [https://www.facebook.com/Nie47]

## 特集

# NIEで培う「人生を舵取りする力」

学習指導要領改訂に向けたキーワードの一つ「人生を舵取りする力」を培うためにNIEに期待される役割について、教育行政の立場から考察いただくとともに、小中高校の先生方に実践例を紹介したい。

次期学習指導要領において、

子どもたちが「自らの人生を舵取りする力」を身に付けることは、重要なテーマの一つとなっている。これは、子どもたちが多様な社会の変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となるために不可欠な資質・能力の育成を目指すものである。議論の中では、情報活用能力の抜本的向上が議論の焦点となっている。新聞を教育に取り入れるNIEは、この新しい時代に求められる能力を育む実践的な手段の一つとなるのではないかと。

### デジタル時代のNIEの意義

現代の子どもたちは、スマートフォン



戸田市教育委員会教育長  
中央教育審議会委員  
戸ヶ崎 勤

パーソナライズされる結果として、

フィルターバブルやエコーチェンバーに陥るリスクを負っている。また、そこから派生する無意識の偏見や思い込み（アンコンシャスバイアス）が自覚なき差別（マイクロアグレッション）を生む可能性も指摘されている。

こうした状況下では、単にデジタル技術を使いこなすだけでなく、情報の真偽や背景を深く吟味するためのメディア情報リテラシー教育が喫緊の課題となっている。

新聞は、この課題に対する解

決策の一助となることが期待される。新聞は、編集者の判断により、社会、経済、文化など様々なジャンルの記事を一覧性をもって提供する。この一覧性により、子どもたちは自分が意図しなかった情報に偶然出会う

「セレンディピティー」を体験し、視野を広げて、フィルターバブルから脱却する機会を得ることが期待できる。

### 共同研究の示唆

情報活用能力とは、情報を収集・整理するだけでなく、その情報をファクトチェックし、批判的に思考するクリティカルシンキングやロジカルシンキングの能力が求められる。

これに関連して、スマートニュースメディア研究所と戸田市教育委員会とで取り組んだ共同研究は大変示唆的であった。

朝の学習で紙の新聞に継続的に接触した生徒は、そうでない生徒に比べ、「新聞のニュースへの信頼」が有意に上昇したことが示された。この信頼度の上昇は、既存の学力の高低とは相

関関係がみられなかった。「新聞は記事作成の過程で何度もチェックされている」と知識として知ることが、若年層が新聞を信頼するに至る最も現実的な

ートと分析されている。新聞記事は様々な個人発信の情報よりも信頼性が高い情報源であることを理解することで、情報に対するリテラシーの基盤が築かれると考えられる。

### 三つの力の統合的育成

学習指導要領が求める三つの資質・能力との関連では、  
○知識及び技能 記事を読み解くことで、時事や社会の構造を体系的に理解し、読み解く力の向上が期待できる。

○思考力、判断力、表現力等 記事を用いて現実社会の課題を多角的に考察・追究する活動は、自ら考え、判断し、積極的に自らの意見を表現できる力の育成が期待できる。

○学びに向かう力、人間性等 新聞を教材・教具として活用し、社会とのつながりを実感することで、民主主義を担う主権者としての意識や、社会への関心・参画意識が高まることを期待できる。

このように、NIEの実践は三つの力の統合的な育成に資するものと考えるのである。

# 新聞から飛び出す経験



玉川学園小学部教諭  
(前横浜国立大学教育学部  
部附属鎌倉小学校教諭)

安田 雄貴

前任校(前掲)の子どもたちと「一年生でも新聞が読めるんだ。」を合い言葉に取り組んだ実践である。

「与えられるのではなく、自ら手に取ってほしい」と思い、毎朝教師である私が新聞を読んでいる姿を見せたり、子どもが興味を持ちそうな記事のある紙面を意図的に広げておいたりした。あえて設置場所を定めなかったことで、新聞を特別なものではなく、より身近なものとして捉えることにつながったと感じる。

また、読み終わった新聞は「取っておこう」という子どもの思いのもと、教室の片隅に重ねていった。積み重なっていく「新聞の山を見て、「毎日発行されている」という新聞の特性や

魅力に気づく姿も見られた。

## つながる、つなげる新聞の世界

新聞の中だけで終わらせないために、学びや遊びとのつながりのある活動を通して、子どもたちが新聞と自分の暮らしがつながっていると感じられるようにした。

国語の学習とのつながりとして、新聞の写真だけを見て、どのような記事なのか想像する活動を行った。想像を広げる楽しさや、想像したことが友だちと異なることのおもしろさだけでなく、同じテーマの記事でも新聞によって使っている写真や言葉が違うことに気づく子どもの



教室に置かれた新聞を読む児童

姿があった。

遊びとのつながりとして行った「クロノリ感想」。2023年秋にニュースパーク(横浜市)で行われたセミナーにて筆者が体験した「クロノリ俳句」を、俳句の代わりに感想を浮かび上がらせる活動へとりメイクした。当初は「新聞を黒く塗っているの!」「悪いことをしている気分」と戸惑っていた子どもたちも、「この言葉がいい

な!」などと、言葉に立ち止まりながら記事に目を向ける姿があった。

また、「海の底にプラスチックゴミが沈んでいる」という一本の記事から生まれた生き物や地球科学についての「問い」をもとに、一年間かけて課題を求めた。「どこに行くか?」「どのように行くか?」も子どもたちが調べ、県内の新江ノ島水族館、海洋開発研究機構などへの

# 報道から考える身近な理科



勝山市立勝山南部中学校  
教諭

西野 尚博

「給食用のニンジンにガラスの異物混入」。福井市の小学校の給食で相次いで同様の異物混入があり、地元の新聞、テレビで連日のように報じられた。私自身も当初は人為的な要因だと思っていたが、最終的に土壤

中の石英の付着だと判明した。

校外学習を実施。成果は、児童が主体的に廃材を使ったワークショップを開催して思いを発信するなど、新聞の中から飛び出して、学びが広がっていった。

たくさんある中の一本の記事。その記事に込められた人々の思いや背景にも触れさせることができた。

新聞を学ぶのではなく、新聞で学ぶという大切な視点を得ることができた。

畑の土壤に含まれていた石英が、ニンジンの収穫時に土と一緒に付着し、輸送中にめり込んだ可能性があると。これらの新聞記事から、2、3年生の理科で日常生活から考える授業実践を構想した。

まず、給食用のニンジンにガラスの異物混入があったという初報段階の記事を読ませ、そこから思ったことや考えたことを発言させた。どの生徒も初めて読んだ記事だったようで「窓

は北海道だったことを伝えた。それでも生徒の思考が進まなかったため、北海道の山の写真を名前を伏せて見せた。この情報から気付いたことをグループで話し合わせた。「山が白い」「そう言えば、北海道には有珠山がある。こんもりした山だ」「無

## 特集 NIEで培う「人生を舵取りする力」

色鉱物が多いかも?」「もしかしたらこの異物は石英か長石か?」などの意見が出てきた。

ここで最初の記事から数日後の「給食混入異物は石英か」と書かれた見出しの記事を読ませた。すると、「自然由来の異物が混入することに驚いた」「発想の転換が大切だと思った」

## 地域貢献のきっかけに



愛媛県立伊予高等学校  
教諭  
河野 綾子

本校では「総合的な探究の時間」を「探Q」と呼び、約20の講座から興味や関心にに応じて選択し、学年を超えて学んでいる。その一つ「NIEく身近な時事問題学習」では、新聞を起点に情報活用力、協働力、問題解決力、発信力を高めることを目標に活動している。

「理科の知識は生活で絶対に必要だと思った。考えをもっと広くしていきたい」などの新たな気付きにつながる発言をした生徒が多かった。目の前の事実を断片的に捉えるのではなく、別の視点をもち、情報の信憑性を確かめようとする姿勢の大切さに気付こうとしていた。その

「理科の知識は生活で絶対に必要だと思った。考えをもっと広くしていきたい」などの新たな気付きにつながる発言をした生徒が多かった。目の前の事実を断片的に捉えるのではなく、別の視点をもち、情報の信憑性を確かめようとする姿勢の大切さに気付こうとしていた。その

## 既習知識の活用カギに

後、改めて1年生の教科書を用いて、山の形と鉱物の含有割合との関係を確認し、既習内容を深めた。

学んだことを生かして現象や事象を捉えること、つまり既習の知識を活用することは非常に

大切だと考える。実践のように、関連付けたり比較したりして本質を深く掘り下げて理解し、考えることは、理科の資質・能力を育むために大切な活動である。物事を一面的な見方だけで捉えるのではなく、理科の知識を生かして多面的・多角的に捉える必要があることに、私自身

が改めて気付かされた。さらに、新聞記事を用いて日常に引き寄せることで、自然の事物や現象が生徒にとって身近なものになった手応えを感じた。今後も授業の中で記事を活用して、日常生活や社会との関連を重視しながら、理科への関心を高める支援をしていきたい。

ちが受け継いでいる。

今回は2024年度に始まった「子ども食堂プロジェクト」を紹介したい。同プロジェクトは「子どもの貧困と孤食」に関する記事をきっかけに、二人の生徒からスタートした。二人は地域食堂を主催するお寺でのボランティアによく参加しており、

## 高まる自己有用感

メンニュー決定後は、地元農家への食材提供の呼びかけや広報活動など、役割を分担して準備した。さらに、前述のはだか麦班と協力し、「はだか麦のおやつ」も手配。25年春の開催当日は50人が訪れ、カレーライスをふるまった。

活動は年度をまたいで続き、25年夏の二度目の開催では、防災キッチンカーを持つ地元企業の協力を得て、はだか麦を使った食事を提供。併せて「夏休み宿題会」や地元の医学部生らとの「救命講習会」も実施した。講習会実施のきっかけは、「訓練用AED購入のためのクラウ

ドファンディング(CF)」を取り上げた新聞記事。こちらからCFを募る医学部生に連絡を取り、子どもたちと高・大学生との講習会が実現した。事後アンケートでは「子どもたちの居場所を作ってくれて助かる」「また開催してほしい」というコメントをいただいた。生徒たちは高校生による社会貢献の可能性を認識し、自己有用感を高めることができた。また、新聞が自己と社会との絆を深める役割を果たしていることを体験的に理解することができた。町内唯一の高校として、地元との連携がしやすいという強みを生かし、今後も「持続可能なNIE」を模索したい。

第16回

いっしょに読もう！新聞

コンクール  
表彰式

第16回「いっしょに読もう！新聞コンクール」の表彰式が2025年12月13日、ニュースパーク（日本新聞博物館、横浜市）で開かれ、小・中・高校各部門の最優秀賞受賞者に賞状と盾が贈られた。受賞者はそれぞれが選んだ記事を執筆した記者と懇談し、記事に込められた思いに触れた。

今回は47都道府県と海外から計6万1428編（小学生4643編、中学生2万5008編、

高校・高等専門学校生3万1777編）の応募があった。1次、2次、最終審査会を経て、校種別に最優秀賞を各1編（計3編）、優秀賞を各10編（計30編）、奨励賞を120編選んだ。また、団体応募470校の中から、優



最優秀賞受賞者と審査委員長ら

秀学校賞を校種別に各5校の計15校（別記）、学校奨励賞184校を選定した。

表彰式の冒頭、新聞協会NIE委員会の坂口佳代委員長（毎日新聞社執行役員編集担当）は主催者あいさつで「最優秀賞の皆さんが選んだ記事は、いずれも今の社会が抱える重要なテーマを取り上げている。新聞をきっかけに、社会の課題を自分事として捉え、考えを深めてくれたことをうれしく思う。これからも、新聞記事を読んで感じたこと・考えたことを、家族や周りの人たちと話し合い、思考を深める訓練をすることが、これからの社会で活躍する皆さんにとって貴重な経験になるはずだ」と呼びかけた。

文部科学省初等中等教育局教

育課程課の上月さやこ教科調査官は、「各作品の社会課題に対して自らの役割を考え、行動にかなげようとする姿勢に大きな感銘を受けた」と述べた。新聞記事を読んで知識を得、家族や友達との対話の中で自分の考えを深め、意見や提言にまとめる本コンクールの取り組みは、主体的・対話的で深い学びによって自らの考えを形成していくプロセスだと指摘。「不確実性が増す社会において、流れてくる情報が信頼できるのか、自ら考え、判断する姿勢が不可欠となる。新聞が情報を取捨選択し、活用する力を育てる身近な教材となることを期待している」と話した。

小原友行審査委員長（広島大学名誉教授、日本NIE学会顧問）は講評で今年の審査を振り返り、応募作の傾向を次の三つのキーワードで表現した。

①「ニュースの喜楽」＝喜びや

楽しみ、温かさを伝える記事を選んだ作品

②「未来への志」＝社会や地域をより良くしたいという志へと高めた作品

③「自己肯定感」＝ニュースを通じて自分の役割や存在価値を考え、それを自ら高めようとする姿勢がみえる作品

そして、最優秀賞の3人に「受賞をスタートラインとして自己肯定感を高め、これからもより良い未来を創造するために志を持って生涯学び続けてほしい」と呼びかけて総括した。

◆コメ問題を身近な視点で考察

埼玉県の行田市立桜ヶ丘小学校5年、篠塚いろはさん（小学生部門最優秀賞）は、コメの価格高騰などの問題を取り上げた記事を読み、以前はコメ作りをしていた祖父のことを思い浮



篠塚さん（左）と山口記者

かべた。「体が動くならいつまでもやっていったかった」という祖父母との対話から、新しい技術で若者が農業に関わるきっかけを作り、消費者が地元のコメを積極的に選ぶことが農家を支える力になり、コメの供給や価格の安定につながっていくと提言した。

かつて実際に祖父母の田んぼを見た時に「黄金色に輝いてきれい」と感じたという篠塚さん。記事を執筆した読売新聞社の山口優夢記者（東京本社社会部KODOMO新聞編集室）は篠塚さんに「読んだ内容を身近な人につなげて考えてくれたことがうれしい」と伝えた。また、今回の記事で取材した福島県の農村風景や農家の思いを通じて「コメや田んぼが日本人にとって特別なものだと分かった。それを実感するには、子供のころから田んぼが身近にあることが大切だと感じる」と述べた。山口記者が俳人でもあることを知った篠塚さんからは、表彰式の様子で一句詠んでほしいとのリクエストがあった。山口記



服部さん（左）と有賀記者

者は「小春日や 大人ばかりの会議室」と詠み、会場となっている会議室が大人ばかりで緊張していると思うが、全員が小春日のように温かな気持ちで祝福していると解説した。

◆記事通じ祖父に寄り添う

東京学芸大学附属世田谷中学校1年、服部陽有人さんは、耳の聞こえにくい祖父の苦勞を思いやる気持ちから、聴覚障害者が笑顔で接客する洋菓子店（サイニングストア）を取り上げた記事を選んだ。祖父と記事について話す中で、会話が聞き取れないときに聞き返すことで相手も疲れてしまうのではないかと心配する「気持ちの面の辛さ」もあると気付く。当初の「補聴器の性能を上げればよい」との考えから、コミュニケーションにおける発想の転換で優しい世の中を作り出せると考えを深めた。

執筆の経緯を聞かれた中日新聞社の有賀博幸記者（編集局生活部編集委員）は、記事に登場する洋菓子店の運営企業、ココトモファーム（愛知県）の社長が掲げる「誰ひとり取り残さない居場所をつくる」という考えが、自らの取材テーマの一つであるSDGsに当てはまったことがきっかけと話した。店で体験した、表情豊かな接客がお客様を笑顔にし、自分まで嬉しくなった気持ちを記事に込めた。普段、どのような記事に興味を持つか聞かれた服部さんは、一番に4コマ漫画に目を通すと話した後、特に生活・暮らしに関する記事が面白いと応えた。「記事は高齢者や女性など自分と異なる立場の視点で社会を切り取っている。新聞を読み始めて、自分では想像できなかったことを立ち止まって考えることができるようになった」と振り返った。また服部さんは、有賀記者が服部さんの受賞に寄せたメッセージ（NIEウェブサイトに掲載）を読み、当初はサイ

ニングストアを知らなかったと書かれていたことに驚いたとして、「記者はなんでも知っていると知っていたが、知らないことに合うことを面白いと思えるところがかっこいい」と伝えた。

◆自身の経験から社会に提言

福岡県の東福岡高等学校2年、清武琳さんは、幼少期から手術や入院を繰り返してきた。自らの経験に基づく作品などをこれまで本コンクールに応募してきたほか、新聞に入院生活リポートを投稿するなど、子ども入院と付き添い者の置かれた状況を社会に訴えてきた。



清武さん（左）と野村記者

今回、こども家庭庁が付き添い家族の負担軽減支援を始めることを記事で知った清武さんは、本コンクールでの入賞をきっかけに数年前から交流を始めた支援活動団体代表者と意見交換した。その中で、望まない入院の制度や制度から外れる人への懸念を知った清武さん。支援の制度化ばかりに注目していた自分を恥じ、広い視野を持ち多くの人の意見を聞いて、真に必要な

優秀学校賞受賞校

- 玉 県 行田市立下忍小学校
- 岐 県 瑞浪市立陶小学校
- 広 島 府中町立府中北小学校
- 香 川 坂出市立川津小学校
- 長 崎 長崎精道小学校
- 埼 玉 城北埼玉中学・高等学校
- 東 京 都 東京学芸大学附属世田谷中学校
- 愛 知 豊田市立藤岡南中学校
- 奈 良 智辯学園中学校
- 佐 賀 嬉野市立吉田中学校
- 北 海 道 北海道富良野高等学校
- 東 京 都 専修大学附属高等学校
- 神 奈 川 神奈川県立新羽高等学校
- 山 口 山口県立下関南高等学校
- 福 岡 福岡県立小倉南高等学校

(15校)

第17回コンクール募集中!

現在、第17回「いっしょに読もう!新聞コンクール」の作品を募集中です。対象は小・中・高校(高専)生です。学校全体でぜひ取り組んでみてください。詳しくはNIEウェブサイトを(https://nie.jp/monthlycontest\_newspaper/2026/)をご覧ください。締め切りは9月8日(必着)です。

な支援を見極めることが重要だと考えるに至ったとつづけた。懇談した西日本新聞社の野村創記者(編集局報道センター)は、読者投稿をきっかけに、自身の子供が長期入院した経験を持つ記者らでチームを組んで執筆した経緯を説明。「国や病院も現状を変えようとしているものの、問題の解決の難しさも分かり、社会の関心を高める必要を感じた」と話した。付き添い入院の負担軽減への意見を求められた清武さんは「医療費の補償制度は整ってきしたが、付き添いによる親の失業対策や休業補償の充実も必要ではないか」と訴えた。

# 新聞の「今」

個人による情報の受発信が容易になり、真偽不明の情報がまん延する弊害が生じている。「正確性」「公共性」を掲げる新聞ジャーナリズムの役割と意義について、日本新聞協会NIE委員会委員長に寄稿してもらった。

## 新聞ジャーナリズムの役割



生成AIが私たちの日常に急速に浸透している。教育現場でも活用が始まり、子どもたちにとってAIを使うことが日常になりつつある。問いかけると即座に回答してくれる、この上なく便利なツールだが、弊害もある。もっともらしく誤った回答をしたり、本物と見分けがつかない偽の画像や音声を作ったりするのだ。

欧州放送連合（EBCU）と英BBCが欧米18か国で昨年行った調査では、チャットGPTやジェミニなどの「対話型生成AI」にニュースについて尋ねると、正確性に問題のある回答が6割近くに上ったという。加えて、SNSには真偽不明の情報があふれている。日本では2024年の兵庫県知事選で偽情報・誤情報が拡散され、選挙結果に影響を及ぼしたとして注目された。そんな時代に新聞ジャーナリズムはどんな役割を果たすべきだろうか。

### 報道で社会を動かす

25年は石破茂前首相が退陣、高市早苗政権が発足し、政局がめまぐるしく動いた年だった。大きな出来事があると新聞社のニュースサイトはよく読まれる。AI検索の普及で閲覧数が減ったとされる昨年もその傾向は変わらず、新聞社の正確な情報が求められていると感じた。

新聞社の情報は、訓練された記者が事実を確認し、何重ものチェックを経て発信される。裏付けのないネット上の情報とは根本的に異なる。新聞社は、公表されない事実を発掘したり、権力を監視したりする役割を担っている。報道によって国や自治体を動かし、社会課題を解決することもある。正確性や公共性はジャーナリズムの根幹であり、新聞社はそのために時間とコストをかけている。

監視の対象となるのは政治家や首長に限らない。昨年度、新聞協会賞を受賞した信濃毎日新聞の「ガソリン価格カルテル疑惑」を巡る報道は、「長野県のガソリン価格が全国一高いのはなぜ？」という県民の疑問から始まった。

記者は、事業者間で交わされた価格調整の電話連絡の音声データを入手。約40店舗で店頭価格を調査し、事業者が事前調整している疑いを報じた。公正取引委員会が調査に乗り出し、店頭価格は多様化した。報道がなければ価格は変わらなかった

ろう。不正を明らかにし、社会に貢献することは、AIにはできないジャーナリズムの仕事である。

### 民主主義を支えるために

AI時代を生きる子どもたちには、利点と限界、そしてネット情報と報道の違いを知ってほしい。AIが生成したもののやネット情報は正確性に問題があることを理解し、立ち止まって考える。メディアリテラシーを身につけ、偽情報・誤情報を信じたり、拡散したりしないようにすることは、ますます重要になるだろう。

そのためにNIE活動は貢献できると考えている。子どもたちが新聞に触れる機会は、学校以外ではほとんどないからだ。昨年、スマートニュースメディア研究所（東京）が埼玉県田市の中学校で、ある調査を実施した。全国紙と地方紙の計6紙が新聞を提供し、1年生約90人が3か月間読み続けた。その結果、新聞記事に対する信頼度が上昇したという。

期間中は気になった記事に丸印を付けたら、読んだ新聞を自宅に持ち帰ったりすることが奨励され、読み方や新聞記事作成の過程も学んだという。

こうした取り組みを入口にして、子どもたちをいかに引きつけていくかは、新聞社の努力にかかっている。従来のような形式や手法では、なかなか届かない。子どもたちが興味を持ちやすいコンテンツを用意し、動画や音声、クイズなど、多様な手段を使ってアプローチする必要がある。

AIやSNSの情報しか見なくなると、自分と同じような意見ばかりが表示され、異なる意見に触れづらくなる。その結果、社会の分断が深まり、民主主義の土台が揺らぐ可能性もある。

偽情報・誤情報に流されず、多角的なものを見る視点を養うことは、これからの時代に欠かせない。NIE活動の積み重ねが民主主義を支えることにもつながる。そんな思いで、今後も教育現場と一緒に取り組んでいきたい。

# NIEアドバイザー紹介

- ①学校名(所属等) ②担当教科
- ③NIE実践歴
- ④新聞を活用するうえでの工夫を一言(敬称略)



●東京都  
白井 史朗  
(しらい・しろう)  
①江東区立東雲小学校  
②全科 ③4年  
④ICTを活用したり、朝の会などを利用したりして、児童が継続的に記事に触れる機会を設けている。



●東京都  
山田 慎一  
(やまだ・しんいち)  
①世田谷区立駒沢中学校  
②国語 ③13年  
④新聞は学びを広げ深めるものだ。生徒にとって新聞が身近になるように、使う、比べる、新聞を使って考える授業を実践している。



●東京都  
小松 純  
(こまつ・じゅん)  
①東京都立練馬高等学校  
②地歴公民 ③15年  
④Society 5.0時代の「新たな教育のスタイル」に沿った、新しいNIEの形を提案していく。



●東京都  
北條 悠子  
(ほうじょう・ゆうこ)  
①東京都立青山高等学校  
②公民 ③7年  
④日々の授業で記事を紹介し、意見交換させると、生徒の視野が広がっていく。級友との話し合いの機会が理解につながっている。



●熊本県  
東郷 一彦  
(とうごう・かずひこ)  
①熊本県立玉名高等学校・附属中学校  
②公民 ③29年  
④司書教諭と連携し、新聞を複数紙読める環境整備、新聞を活用した教科横断型授業を実践し、生徒の視野を広げるようにしている。



●宮城県  
高橋 翔平  
(たかはし・しょうへい)  
①宮城県岩ヶ崎高等学校  
②国語 ③3年  
④社会的な出来事への関心を喚起し、情報を客観的かつ正確に読み取る力を高めることを意識して実践を行っていきたい。



●東京都  
堀口 友紀  
(ほりぐち・ともり)  
①板橋区立弥生小学校  
②全科 ③22年  
④記事で社会を知り、五七五の見出しまとめと150字短文シートで、事実と意見を分け、自分の考えを書けるよう指導している。



●東京都  
林 謙二  
(はやし・けんじ)  
①青山学院中等部  
②国語 ③8年  
④新聞づくりの面白さと達成感を味わわせたい。新聞がいかにも工夫されてできているかにも気付かせたい。



●東京都  
杉浦 光紀  
(すぎうら・こうき)  
①東京都立新宿山吹高等学校  
②公民 ③12年  
④主権者教育にこそNIE!! 公示日翌日の1面や党首第一声の記事を複数紙で用意。生徒自身が選んで読み、現実の政治を判断する。



●東京都  
水野 雄人  
(みずの・ゆうと)  
①東京都立東久留米総合高等学校  
②公民 ③2年  
④新聞は単なる「読み物」ではなく、自身の意見を表明する「民主主義の広場」であり、社会や人につながる場でもあると考えている。



●東京都  
熊谷 嘉喬  
(くまたい・よしたか)  
①江東区立東川小学校  
②全科 ③10年  
④子どもも教師も、無理なく楽しく新聞に触れ続けること。小さな積み重ねが大きな成長に! クラスもまとまり、いいこと尽くし!



●東京都  
山岸 幸枝  
(やまぎし・さちえ)  
①品川区立城南小学校  
②全科 ③18年  
④児童が楽しく取り組めて、持続可能な教材準備が大切だ。司書や学年団と協力して、みんなで取り組むNIEを目指している。



●東京都  
高橋 伸明  
(たかはし・のおあき)  
①新渡戸文化中学校・高等学校  
②国語 ③7年  
④授業や特別活動で生徒が自ら「記事を選択する」「記事をもとに話す・書く」ことを大切にし、探究活動等でも活用している。



●東京都  
林 敏昭  
(はやし・としあき)  
①東京都立芝商業高等学校  
②商業科 ③10年  
④商業科の授業は、世の中の出来事を基にしている。新聞から教科書に書いてある内容に関連する最新の情報が得られるので積極的に活用している。



●長野県  
柿沼 佑樹  
(かきぬま・ゆうき)  
①塩尻市立吉田小学校  
②全科 ③17年  
④地域の課題や願いを受けて新聞製作に取り組んでいる。地域への愛着や主体性、国語力の向上につながる活動を展開していきたい。

**NIE**  
**フラッシュニュース**

◇NIE全国大会  
7月30、31の両日、広島市で開催する第31回大会は、初日にパネル討議、元陸上選手の為末大氏による記念講演、交流会を行い、2日目は公開授業、実践発表等を予定。2日間を通してポスター発表も実施します。第32回大会は2027年に仙台市で、第33回大会は28年に新潟市(今年4月の新潟県NIE推進協議会総会で正式決定)で開催の予定です。

◇NIEニュース休刊  
NIEニュースは今号(第107号)をもって休刊します。今後もNIEウェブサイト等で多彩な情報を発信していきます。



毎週木曜日の朝活動（8時5分〜20分）で、2週間を1サイクルとしてNIEを行っている。

1週目、児童生徒は図書室の棚から新聞を選び、興味や関心を持った記事を選択。選んだ理由や感想、意見をワークシート「朝の新聞」に記入する。2週目は選んだ記事を教室のモニターに映し出して共有しながら、ワークシートの内容を30秒程度で発表する。

2週間（まとめる・発表）で取り組むため、短時間での活動が可能である。さらに活動を円滑にするため、ワークシートは

### 事務局長から一言

美しい丘陵畑作地帯にある樹海学校。ドラマ「北の国から」の舞台の麓郷地区にも近い。その魅力は「ふらの東山エリアフ

できる限り簡潔にした。負担なく続けられるようにして読解力や表現力、情報活用能力の向上を図っている。

たワークシートも読めるよう、廊下に「NIEコーナー」を設置して掲示している。また、過去の自分の記事を読み返せるようにファイリングし、次年度に

## 富良野市立樹海学校

教諭 佐藤 一博

◎北海道富良野市／校長・大柄 洋樹／児童・生徒数・24人  
◎特色・樹海小と樹海中を統合して2022年に開校した義務教育学校。  
教育目標「ふるさと樹海に学び 世界に目を向け行動する人」のもと、地域と連携を図りながらカボチャ栽培や森林学習など、自然を生かした教育活動に取り組んでいる。開校当初よりNIE実践指定校として新聞を活用し、文章力や表現力を高める活動を行っている。



記事をモニターに映し出し、ワークシートの内容を発表



関心を持って選んだ記事の感想や意見を書き込んだワークシート

「オトコンテス」のホームページで堪能していただきたい。

そんな豊かな環境の下で育った児童生徒は、授業での発言や発表の機会が多く、堂々と発表できる力を身に付けているとい

う。同校のNIE活動は5〜9年生が対象。情報にじっくり向き合い、主体的に読み解く力の向上を目指している。

教育目標にもあるように、東山地区の記事を通じて郷土愛を

引き継げるようにした。

このほか、国語科の授業では社説や投書などを参考にして、意見文を書くのに必要な情報の収集や書き方を学習したり、新聞の構成を学習したりしている。他教科においても、学校司書と連携しながら過去の記事をスクラップ資料にまとめて活用している。

また、地域に根ざした記事を切り取って掲示し、新聞に対する関心を高めている。児童生徒は社会の出来事に関心を持ち、気になった出来事をさらに詳しく調べるなど、主体的に学習に取り組む姿勢に成長が見られている。今後も「継続できる活動」としてNIE活動に取り組む。教育に新聞を取り入れながら児童生徒の成長を促していきたい。



河北新報社は2021年から中学生対象の「かほく防災記者研修」を実施している。研修は1年間。家族の被災体験を取材したり、家庭の備えに取り組みんだりして、年3回原稿を書いてもらい、朝刊に掲載している。

5年間で68人が修了した◆昨秋、ある修了生の母親と話す機会があった。以前は新聞に無関心だった娘が、自分の記事が載ったり、学校に掲示されたりしたことがうれしく、反響も自信になり、新聞を読むようになったらしい。今では、社会課題を自分事として捉え、自らの考えを自らの言葉で家族に披露しているという◆修了生は実名で社会に発信することで自分らしさに気付き、社会とのつながりも実感したようだ。防災記者は河北新報社独自の活動だが、投稿欄は、どの新聞にもある。児童生徒の責任感と市民の自覚を育む場として投稿欄の活用を勧めたい。

（北海道NIE推進協議会事務局長・福元久幸）

（河北新報社・須藤宣毅）